様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年　6 月　17 日現在

機関番号：　２５１０１

研究種目：　基盤研究（C）

研究期間：　平成 22～24 年度

課題番号：　２２５６０６５０

研究課題名（和文）　石窟寺院への憧憬　－岩窟／絶壁型仏堂の類型と源流に関する比較研究

研究課題名（英文）　Aspiration for the Chinese Grottoes -Comparative study on the types and the origin of the Buddhist hall compounded of the cave and overhang style architecture-

研究代表者
浅川 滋男（ASAKAWA Shigeo）　鳥取環境大学 環境学部 環境学科 教授
研究者番号：　９０１８３７３０

研究成果の概要（和文）：　山陰地方に卓越する懸造の仏堂は岩窟と複合しており、古代中国の石窟寺院を小型化した仏堂にみえる。その成立年代が不明であるため、鳥取市に所在する摩尼寺「奥の院」遺跡を発掘調査した。その結果、平安時代後半に巨巌を掘削して岩窟仏堂をつくり、その正面を整地して懸造の建物を建てていたことが判明した。さらに、インドから中国に至る大乗仏教のコースを遡行して石窟寺院を視察し、日本の岩窟型仏堂と中国の石窟寺院を比較した。その結果、入母屋造の礼堂を岩窟に密着させて正面に設ける B-2a 型が華北の石窟寺院に最も近い一方で、岩窟内に独立した懸造堂宇を設ける B-2b 型が福建省の甘露寺に類似することが明らかになった。甘露寺については、2012 年 9 月に実測調査をおこなった。このほかミャンマー、ラオス、ブータンなどでも洞穴僧院を視察し、最古の証拠を残す西インド石窟群と上座部仏教の僧房窟群との類似性に言及している。

研究成果の概要（英文）：　As overhang style Buddhist halls(*kakezukuri*) distinguished in the San-in district often compound with caves, they seem to be the downsized Chinese grottoes. Because their building age was not clear, we excavated the innermost sanctum ruins of Mani-temple located in Tottori-city. As a result, we proved that ancient people not only dug a huge rock and made the cave halls for enshrining Buddhist images, but also built a *kakezukuri* on the leveled ground in front of the huge rocks after the latter half of the Heian era. Besides, we inspected the grottoes in the course of the Mahayanist Buddhism imported from India to China, we compared a Japanese cave type Buddhist hall with the Chinese grottoes. As a result, we proved that what we have named B-2a type, *Irimoya-zukuri* worship hall attached to rock cave from the front side, most resemble the grottoes in north China. On the other hand, B-2b type that is independent *kakezukuri* in the cave, is similar to Ganlu-temple in Fujian Province, South China. We measured Ganlu-temple at September, 2012. In addition, we inspected the cave monasteries in Myanmar, Laos and Bhutan, and we mention the similarity between West India stone cave ruins with the oldest evidence and the cave monasteries of Sthavira Buddhism.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
平成 22 年度	1,800,000	540,000	2,340,000
平成 23 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
平成 24 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野： 工学
科研費の分科・細目： 建築史・意匠
キーワード： 石窟寺院　岩窟仏堂　洞穴僧院　懸造　奥の院　窟の建築化　山林寺院

１．研究開始当初の背景

当時、鳥取県は投入堂を中心とする三徳山三仏寺の世界文化遺産登録をめざして活動していたが、文化庁等の評価は芳しいものでなく、とくに「顕著な普遍的価値」をあきらかにできていない、という指摘があった。そこで、三仏寺投入堂（三朝町）ほか不動院岩屋堂（若桜町）、鰐淵寺蔵王堂（出雲市）、焼火神社（隠岐）などの岩窟・岩陰型仏堂を国内外の類似例と比較分析し、アジア的視野から文化史的位置を明確にしようという思惑があった。

２．研究の目的

山陰地方の密教系諸山には、三仏寺投入堂に代表される絶壁に形成された懸造の仏堂のほか、岩窟・岩陰に石仏・石塔等の信仰対象を祀る古式の仏堂が少なくない。これらを「岩窟／絶壁型仏堂」と総称して、その立地・縁起・構造・祭祀形態などを詳しく調査し、おもに空間構造の特性から類型化を試みるとともに、中国・中央アジア・インド等の石窟寺院や懸造寺院との比較を通して、「初期山岳仏教の岩窟型仏堂が古代中国石窟寺院のミニチュア」であった可能性について検証する。国内では岩窟型仏堂の卓越する大分・福岡などの類例を集成して岩窟型仏堂の類型化を試み、その類型と大陸の石窟寺院との関係を、おもに木造建築と岩窟の関係性を中心に考察する。

今回はおもに大乗仏教の伝播経路であるインド→中央アジア→中国→朝鮮半島の類似例を視察し、日本との比較を進めるが、視野は上座部仏教やチベット系仏教の文化圏にまでひろげる。一方、国内では、懸造・岩窟型仏堂の配される「奥の院」の歴史が不詳であり、鳥取市に所在する摩尼寺「奥の院」遺跡の発掘調査をおこない、「奥の院」の成立と展開についても考察し、復元研究に取り組む。

３．研究の方法

以下の調査研究を進めた。

① 日本国内における岩窟型懸造仏堂の基礎資料（所在地・歴史・建築構成等）の集成と分布図作成。さらに、岩窟と懸造の複合した仏堂の類型化を試みる。
② 摩尼寺「奥の院」の発掘調査： 山頂から60m下った地点にある「奥の院」遺跡の平場や岩窟周辺を発掘調査し、「奥の院」の成立年代をあきらかにし、歴史的位置づけを明確にした上で、建築遺構の復元研究に取り組む
③ 中国、朝鮮半島、中央アジア、インド等における大乗仏教系の石窟寺院・懸造寺院を視察し、①で試みた岩窟仏堂の諸類型と比較する
④ 上座部仏教及びチベット系仏教の洞穴僧院についても視察し、初期石窟寺院遺跡との関係を予察する。

４．研究成果

【初年度の成果】 鳥取市の喜見山摩尼寺「奥の院」遺跡で発掘調査をおこなうとともに、国内外の関係遺跡・建造物を調査した。摩尼寺は帝釈天降臨と円仁再興の縁起をもつ天台宗の寺院で、現在の境内は山麓にあるが、山頂に近い標高約 290mの地点に「奥の院」の遺跡が残っている。そこには岩窟・岩陰の二層構造の仏堂が現存し、正面に２段の加工段（平場）が形成されている。初年度は「奥の院」の４ヶ所に計 200 ㎡のトレンチをあけ、約４ヶ月をかけて発掘調査した。下層で平安時代の柱穴と井戸跡、上層で室町時代後期以降の大型仏堂跡（8 間以上×8 間以上）を検出した。遺物は 8 世紀以前に遡る土器が出土しており、行場としての出発が奈良時代に遡る可能性があるものの、下層における加工段と建築物の出現は 10 世紀後半以降に下るであろう。

2010 年 9 月には、中国甘粛省で麦積山石窟、仙人崖、敦煌莫高窟・楡林窟などを視察した。山西省大同の雲岡石窟寺院では、石窟仏堂の正面に礼拝のための木造礼堂を設け、全体を「内陣礼堂造」としていたが、甘粛の場合、礼堂にあたる木造建築はなく、石窟正面に窟檐（片流れ屋根の差し掛け庇）を設けるのみであった。11 月には韓国慶州を訪問し、石窟庵と南山を視察した。前者は華北の石窟寺院を思慕する人工の石窟寺院であり、後者でみる磨崖仏と複合した岩窟仏堂は山陰方面のそれとよく似ており、一部で木造建築の痕跡を確認できた。国内では、大分県の六郷満山を視察した。六郷満山の密教寺院群は８世紀に宇佐八幡の神宮寺（弥勒寺）の行場として創建されたものであり、いまも「奥の院」が境内の一部として活用されている。しかも、神仏習合が早くから進んでおり、奥の院の正殿は「本殿」と称される。その本殿形式には、素朴な差し掛け庇タイプから、流造、入母屋造など多彩であり、摩尼寺「奥の院」遺跡建物復元の参考となった。

【第２年度の成果】 発掘調査した摩尼寺「奥の院」遺跡の出土遺物・土壌・岩石等に

ついて自然科学分析を進め、報告書『摩尼寺「奥の院」遺跡－発掘調査と復元研究－』を刊行した。下層から出土した土器がわずか数点という弱点を AMS 法 C14 年代測定で補い、下層の存続年代は 10 世紀後半～16 世紀である蓋然性が高まった。上層から出土した土器 160 点のうち平安時代以前のものが 40 点以上を占めることも、下層が平安時代まで遡りうることを裏付けている。なお、岩石鑑定によると、下層整地土から出土する凝灰岩は「変質凝灰岩」であり、岩陰仏堂周辺の「デイサイト凝灰岩」とは若干異なることがあきらかになり、下層整地年代と岩陰・岩窟開鑿年代の一致は確定できなかった。岩窟仏堂などの関連遺跡については、ラオス・ミャンマーの洞窟寺院、中国クチャの千仏洞、インドのアジャンタ等石窟寺院を視察し、国内では福岡県朝倉郡宝珠山で「小型の投入堂」と呼べる熊野神社（1686）を発見した。各類型と中国石窟寺院との相関性を検討した結果、入母屋造の礼堂を岩窟と密着させて正面に設ける六郷満山系のタイプ（B-2a 型）が華北の石窟寺院に最も近い一方、岩窟内に独立した懸造堂宇を設ける山陰系のタイプ（B-2b 型）が華南の福建省に存在することをあきらかにした。日本の岩窟・岩陰型仏堂の成立は平安時代後半以降に下る可能性が高いので、南北朝～唐代に隆盛した華北の石窟寺院との間に直接的な系譜関係を認めがたいけれども、華北の石窟寺院は宋代以降も存続しており、平安時代の日本に影響を与えた可能性がある。

これまで石窟寺院・岩窟仏堂を木造建築との関係で捉えてきたが、クチャやアジャンタを視察し、木造の要素は皆無に近かった。しかし、それでも石窟は「建築化」している。アジア各地では仏影の安置場所として「窟」に執着しながらも、「窟（いわや）の岩屋化」あるいは「窟の建築化」が地方独自に進んでいる。それが石窟・岩窟の多様性の根源にあることを知った。

【最終年度の成果】　中国における B-2b 型の代表例である福建省の甘露寺を調査した。甘露寺は南宋紹興年間造替の古刹で、岩陰・岩窟前面の大きなプラットフォームを巨木柱１本で支え、その上に複数の仏堂を構える。平安末の東大寺大仏殿再建にあたって日本人が視察に来たという寺伝も残っている。残念なことに、1960 年代に火災で全焼しており、現在の建物はその後の再建による。甘露寺は「南方の懸空寺」と称される中国の代表的な懸造寺院だが、懸空寺は絶壁に張り出し、甘露寺は岩陰・岩窟内に納まる点で異なる。三仏投入堂や不動院岩屋堂と類似点が多いのは甘露寺の方である。甘露寺調査の後には、福州市に残る南方中国最古の木造建築、華林寺大殿（北宋）も調査した。大仏様と禅宗様が複合化しているが、大仏様の色彩が強い。

9 月にはブータン仏教発祥の地であるタクツァン僧院を始め、いくつかの洞穴僧院を調査した。今回滞在したパロ／ティンプー地区には数千の寺院があり、山の斜面におびただしい数の懸造式洞穴僧院が残っている。これらは僧の生活空間であると同時に瞑想修行の場であり、インドで仏教が発生した当時の姿を彷彿とさせる。このブータンでの体験から、「チベット系仏教及び上座部仏教の洞穴僧院に関する比較研究」を構想し、平成 25～27 年度の新規科研費に採択された。12 月にはトルコのカッパドキアでキリスト教の洞穴住居・洞穴僧院を調査した。文明の十字路と呼ばれる地域の洞穴住居・洞穴僧院と中国・インドのそれに系譜関係があるか否かという問題については今後の課題と言えよう。

9 月末にはアジア石窟寺院研究会を主催し、雲岡石窟及び西インドの初期石窟に関して討論した。以上の成果を『聖なる巌－窟の建築化に関する比較研究－』という題目の報告書にまとめ刊行した。これが３冊めの科研報告書である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

①┌ 岡垣頼和・浅川滋男（2012）「岩窟・岩陰型仏堂と木造建築の関係についての調査ノート」『鳥取環境大学紀要』第 9 号・第 10 号合併号：p.135（査読有）

②┌ 箱崎和久・中島俊博・浅川（2013）「山林寺院の研究動向 －建築史学の立場から－」『鳥取環境大学紀要』第 11 号：pp.69-84（査読有）

③┌ 眞田廣幸・清水拓生・檜尾恵・浅川（2013）「クチャの千仏洞を訪ねて －中国最古の石窟寺院－」『鳥取環境大学紀要』第 11 号：pp.85-98（査読有）

④┌ ASAKAWA et al.,（2012）“Innermost Sanctum Ruins of Mani-temple : Excavation and Reconstruction Study”, The 9th ISAIA（International Symposium on Architectural Interchanges in Asia）: 6p.(USB), 日中韓建築学会（査読有）

〔学会発表〕（計２件）

①┌ 浅川他（2012）「山のジオパークにむけて－摩尼山と摩尼寺「奥の院」遺跡－」『山陰海岸ジオパーク国際学術会議「湯村会議」』要旨集：p.51-52（PS 発表、2012 年 11 月 23 日＠兵庫県新温泉町夢ホール）

②┌ 浅川（2012）「摩尼寺奥の院遺跡の発掘調査－摩尼山を中核とする景勝地トライアングル構想とともに－」「新老人の会」鳥取支部 東部ブランチ（2012 年 11 月 18 日＠高砂屋）

〔図書〕（計４件）

①「浅川編（2011）『大山・隠岐・三徳山 ―山岳信仰と文化的景観－』鳥取環境大学建築・環境デザイン学科＆鳥取県教育委員会文化財課歴史遺産室、112p.

②「浅川編（2012）『摩尼寺「奥の院」遺跡－発掘調査と復元研究－』科学研究費成果報告書、鳥取環境大学、123p.

③「浅川編（2013）『聖なる巌（いわお）－窟（いわや）の建築化をめぐる比較研究－』科学研究費成果報告書、鳥取環境大学、125p.

④「浅川滋男『建築考古学の実証と復元研究』同成社、521p.

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

http://asaxlablog.blog.fc2.com/
http://asalab.blog11.fc2.com/

６．研究組織

(1)研究代表者

浅川　滋男（ASAKAWA　Shigeo）
研究者番号：９０１８３７３０